

檸檬

梶井基次郎



えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終おさ圧えつけていた。焦躁しょうそうと言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだあとに宿酔ふつかよひがあるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやつて来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかつた。結果した肺尖はいせんカタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上がつてしまいたくなる。何か私を居堪いたたまらずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故なぜだかその頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかつた街だとか、

その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転がしてあつたりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであつた。雨や風が蝕んでやがて土に帰つてしまふ、と言つたような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかつていたり——勢いのいいのは植物だけで、時とするとびっくりさせるような向日葵があつたりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。

そこで一月ほど何も思わず横になりたいたい。希^{ねが}わくはここがいつの間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がようやくよく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになつた。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、さまざまの縞^{しま}模様^{ようよう}を持つた花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠^{ねずみ}花火^{はなび}というのは一つずつ輪になつていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆^{そそ}つた。

それからまた、びいどろという色硝子^{ガラス}で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになつたし、南京玉^{なんきんたま}が好きになつた。また

それを嘗^なめてみるのが私にとつてなんともいえない享樂だったのだ。あのびいどろの味ほど幽^{かす}かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱^なられたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなつて落ち魄^ぶれた私に蘇^{よみが}えつてくる故^{せい}だろうか、まったくあの味には幽^{かす}かな爽^{さわ}やかなんとなく詩美と言つたような味覚が漂つて来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかつた。とは言えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰めるためには贅^{ぜいたく}沢^{たく}ということが必要であつた。二銭や三銭のもの——と言つて贅^{ぜいたく}沢^{たく}なもの。美しいもの——と言つて無氣力な私の触角^こにむしろ媚^こびて来るもの。——そう言つたものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕^{むしば}まれていなかつた以前私の好きであつた所は、

たとえば丸善であつた。赤や黄のオードロンやオードキニン。洒落^{しやれ}た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持つた琥珀色や翡翠^{ひすい}色の香水^{いろう}。煙管^{こうすいびん}、小刀、石鹼^{せつけん}、煙草^{たばこ}。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあつた。そして結局一等いい鉛筆を一本買うくらいの贅沢をするのだった。しかしここももうその頃の私にとっては重くるしい場所に過ぎなかつた。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下宿を転々として暮らしていたのだが——友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空氣のなかにぼつねんと一人取り残された。私はまたそこから彷徨^{さまよ}い出なければならなかつた。何かが私を追いたてる。そして街から街へ、先に言つたような裏

通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留まったり、乾物屋の乾蝦ほしえびや棒鱈ぼうだらや湯葉ゆばを眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町さかを下り、その果物屋で足を留めた。ここでちよつとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きなお店であつた。そこは決して立派な店ではなかつたのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあつて、その台というのも古びた黒い漆塗うるしぬりの板だつたように思える。何か華やかな美しい音楽アツレグロの快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まつたというふううずに果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほど堆高うすばらく積まれている。——實際あその人參葉にんじんばの美しさなどは素晴すばらしかつた。それから水に漬つけてある豆だとか

くわい
慈姑だとか。

またその家の美しいのは夜だった。寺町通はいつたいに賑にぎやかな通りで——と言って感じは東京や大阪よりはずっと澄んで
いるが——飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それ
がどうしたわけかその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もとも
と片方は暗い二条通に接している街角になつていたので、暗い
のは当然であつたが、その隣家が寺町通にある家にもかかわら
ず暗かつたのが瞭然はつきりしない。しかしその家が暗くなかつたら、
あんなにも私を誘惑するには至らなかつたと思う。もう一つは
その家の打ち出した廂ひさしなのだが、その廂が眼深まぶかに冠つた帽子の
廂のように——これは形容というよりも、「おや、あそこの店は
帽子の廂をやけに下げているぞ」と思わせるほどなので、廂の
上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭に点つけら

れた幾つもの電燈が驟雨しゅううのように浴びせかける絢爛けんらんは、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電燈が細長い螺旋棒らせんぼうをきりきり眼中へ刺し込んでくる往来に立つて、また近所にある鑑屋かぎやの二階の硝子窓ガラスをすかして眺めたこの果物店の眺めほど、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀まれだった。

その日私はいつになくその店で買物をした。というのはその店には珍しい檸檬れもんが出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのも見すばらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかつたので、それまであまり見かけたこととはなかつた。いったい私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈たけの詰まつた紡錘形の恰好かっこうも。——結局私はそれ

を一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いてきた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛ゆるんで来たともえて、私は街の上で非常に幸福であつた。あんなに執拗しつこかつた憂鬱が、そんなものの一顆いっかで紛らされる——あるいは不審なことが、逆説的なほんとうであつた。それにしても心というやつはなんとという不可思議なやつだろう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかつた。その頃私は肺尖はいせんを悪くしていつも身体に熱が出た。事実友達だれかれの誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の掌が誰のよりも熱かつた。その熱い故せいだつたのだろう、握っている掌から身内に浸み透つてゆくようなその冷たさは快いものだつた。

私は何度も何度もその果実を鼻に持つていつては嗅いでみた。その産地だというカリフォルニアが想像に上つて来る。漢文で習つた「売柑者之言」の中に書いてあつた「鼻を撲つ」という言葉が断れぎれに浮かんで来る。そしてふかふかと胸一杯に匂やかな空気を吸い込めば、ついぞ胸一杯に呼吸したことのないかたつた私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇つて来てなんだか身内に元気が目覚めて来たのだつた。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと言いたくなつたほど私にしつくりしたなんて私は不思議に思える——それがあの頃のことなんだから。

私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩かっぽした詩人のことなど思

い浮かべては歩いていった。汚れた手拭の上へ載せてみたりマン
トの上へあてがってみたりして色の反映を量はかつたり、またこん
なことを思ったり、

——つまりはこの重さなんだな。——

その重さこそ常つねづね尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこ
の重さはすべての善いものすべての美しいものを重量に換算し
て来た重さであるとか、思いあがった諧かいぎやくしん謔心からそんな馬鹿げ
たことを考えてみたり——なにがさて私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前
だった。平常あんなに避けていた丸善がその時の私にはやすや
すと入れるように思えた。

「今日は一つひと入ってみてやろう」そして私はずかずか入って行っ
た。

しかしどうしたことだろう、私の心を充たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の壇にも煙管きせるにも私の心はのしかかつてはゆかなかつた。憂鬱が立て罩こめて来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！ と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出してはみる、そして開けてはみるのだが、克明にはぐつてゆく気持はさらに湧いて来ない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみななくては気が済まないのだ。それ以上は堪たまらなくなつてそこへ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだったアングルの橙だいだい色の重い本までなおいつそうの堪たえがたさのた

めに置いてしまった。——なんとという呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になってしまつて、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒しさら終わつて後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味わっていたものであつた。……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂たもとの中の檸檬れもんを憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみたら。「そうだ」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰つて来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌あわただしく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去つたりした。奇怪な幻想

的な城が、そのたびに赤くなったり青くなったりした。

やつとそれはでき上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬れもんを据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえつていた。私は埃ほこりつぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイデアが起こった。その奇妙なたくらみはむしろ私をぎよつとさせた。

——それをそのままにしておいて私は、なに喰くわぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐつたい気持がした。「出て行こうかなあ。そう
だ出て行こう」そして私はすたすた出て行つた。

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ほほえませた。丸善の棚
へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、
もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をする
のだったらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな
丸善も粉葉こっばみじんだろう」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩いろどっている
京極を下つて行つた。

後註

- 一 「潤歩」は底本では「※歩」¹

檸檬

-
- 1 「さんずい+闊」

檸檬

底本：「檸檬・ある心の風景」旺文社文庫、旺文社
1972（昭和 47）年 12 月 10 日初版発行
1974（昭和 49）年第 4 刷発行

入力：j.utiyama

校正：野口英司

1998 年 8 月 31 日公開

2005 年 10 月 7 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。